

研究課題名 教員養成段階で行うスポーツ指導プログラムの効果に関する研究

研究代表者 岡田 雄樹

日本体育大学児童スポーツ教育学部は 2016 年度に完成年度をむかえ、より多くの小学校教員を輩出することをめざしている。しかし、多くの学生が教員採用試験に合格し採用されたとしても「即戦力」として活躍できるであろうか(永田、2007)。中央教育審議会(2015)(以下、中教審とする)では、教員養成に関する課題のなかで、教職課程の学生が学校や教育に深い理解や意欲をもたずに教員免許を取得し、教員として採用されている現状があることに警鐘を鳴らしている。そのことから「実践的指導力の基礎の育成に資するとともに教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせるための機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要」だとしている。

教員養成段階の学生が学校現場や教職を体験できる機会は、教育実習や模擬授業が中心であると言って良いであろう。近年体育系の教員養成大学(学部やコース)では、教師の力量や成長に焦点をあて教師教育に関わる授業や実践が盛んに行われている(国立教育政策研究所、2011)。また、体育教師研究として教師教育の研究知見が蓄積されつつあり一定の成果をあげ、教員養成段階で行う模擬授業やロールプレイの効果やその観察方法などあらゆる側面から意義や課題の論議は進められている(木原ら 2008、長谷川ら 2010、2010、藤田ら 2010、嘉数ら 2010、村井ら 2012、北澤ら、2013、久保ら 2013、清水ら、2014、松本、2014、2015、岩田ら、2014、2015)。模擬授業を行う意義や効果については先行研究に倣う通りであるが、ここで問題となるのが、これらは模擬やロールプレイといった実際の子どもの手を相手に指導を行えない現実である。そのことから、現状として実際の子どもの前に立てる機会は教育実習のみであると言って良いであろう。

そこで、本研究では地域の児童スポーツ(指導)に着目し、ボランティア活動を通して子どもたちと触れ合う機会や指導する経験ができるのではないかと考えた。そこで、本研究の目的は、教員養成段階の学生が地域のスポーツ指導を通して 1.指導計画をつくる 2.実践する 3.実践を振り返り省察(リフレクション)をするという観点から、スポーツ指導プログラム(理論と実践)の効果を明らかにすることである。なかでも、3つ目に重点をおき、本スポーツ指導プログラムの効果を省察(リフレクション)の観点から検討する。

分析方法は、岩田ら(2010)が考案したリフレクションシートを修正して用いた。リフレクションシートには、「カテゴリーⅠ」として「授業の計画」「授業の運営」「教授行為」「教材」「子ども」「その他」に分けられている。岩田(2010)との違いは「子ども」が含まれているかどうかであるが、本研究でのスポーツ指導の対象は、子どもを対象にしているためこのカテゴリーを付け足した。また、「カテゴリーⅡ」は、教員養成段階の学生(以下、学生)が記述するリフレクションシートには記載されておらず分析のカテゴリー分けのために使用している。

本研究から明らかになったことは以下のことである。

- ① 本プログラムは実際の子どもの手を相手に指導できることが強みであった。しかし、1度や2度の指導程度では学生のリフレクションの能力は変化しないと推察できる。
- ② 学生は本プログラムの指導経験を5回以上行うことによって、「子ども」に対する問題を読み取り、リフレクションをすることができるようになる可能性がある。